

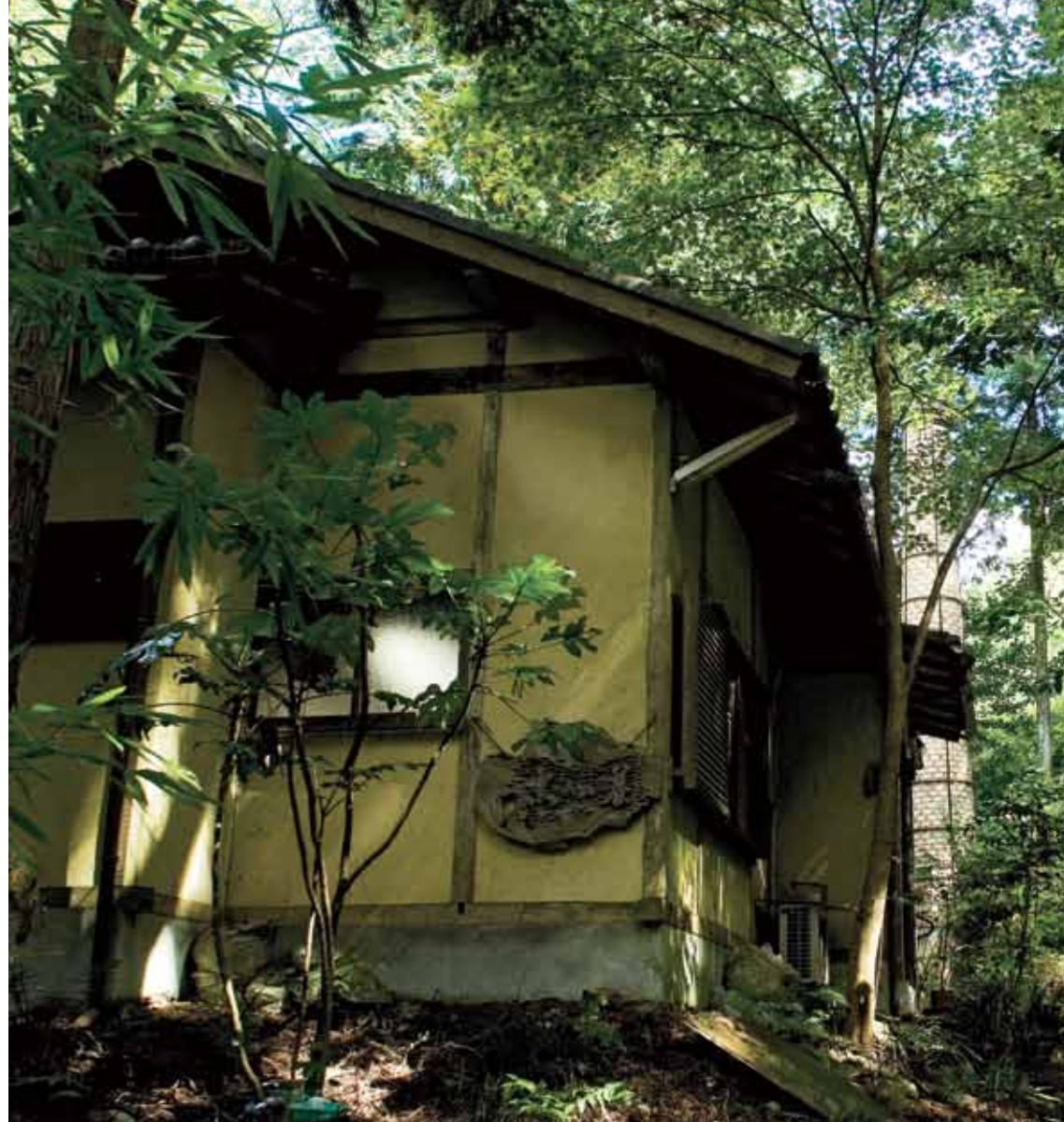
桃山時代と現代の感性が交錯する、 彫刻的なおいしいのする志野焼

陶芸家 樋口雅之さん

小川が流れる林の中に、樋口雅之さんの穴窯がある。
岐阜県可児市久々利大萱。

そう、ここは荒川豊蔵氏が古窯跡から、
桃山時代の志野焼の陶片を見つけた地なのだ。
志野焼の聖地で、桃山時代の陶工たちの
息遣いや足跡を感じながら作陶する樋口さん。
樋口さんが追い求める茶陶とは……。

文／中川知英



桃山時代の陶片たち。織部や志野や黄瀬戸など宝の山。見ているだけで胸が高鳴る。



大萱にある樋口さんの穴窯。
1200度を保つには「赤松の薪がいいですね」。

時空を超えた陶片との 会話で見えてくる、 桃山時代のエッセンス。

威

風堂々とした面構え。どっしりとした風格を漂わせる志野の茶碗や彫刻的なアートを感ぜさせる花入れ。養心窯4代目である父力三さんの背中を見て育ち、小学生の頃から「抹茶茶碗をつくりたい」と当たり前のように揺るぎない気持ち言葉をしていた。

「大萱に窯をつくったのは父です。『大萱』に憧れを抱いていたのだと思います」と樋口さん。周辺はゴルフ場だらけなのだが、造成時には、いい土が出た。「何番のグリーンの下がいいよ、なんてね」。ぼそぼそとしたもぐさ土。決して扱いやすい土ではないが、

「味を求めるには、個性の強い山土は避けられないですね。原土は、自分でつぶして好きな粗さにできます」。一筋縄ではいかない土をどう生かすのかも腕の見せ所だ。「土の顔を見て、いい顔してると思っても耐火度が低かったり、実際に焼かないとわからないところはありますね」。

大萱は荒川豊蔵氏が桃山時代の志野焼の陶片を見つけた場所。昔を知る陶片の宝庫でもある。まるで、子どもが「ボクの宝物」と称して木の实や石などを収集するように、樋口さんの心の琴線に響くものだけが無造作に木箱に入れられている。あー、ここでは、



志野花入れ5万2500円。



赤志野茶碗12万6000円。



鼠志野茶碗12万6000円。

特別なものではなく日常の光景
なんだと改めて、この地がもつ意
味、奥深さを実感。陶片を手の平
にのせてみると、土のなせる業な
のか、とりわけ軽い。

一つひとつ手にとりながら「こ
の高台はいいなあ、参考にしよう
とか、フリーハンドで上手に渦巻
きが描けているな、これは下手く
そや、なんてブツブツいいながら
見えていますね。ちょっとしたアク
セントが洒落てるんですよ」と、
樋口さんはなんだか楽し気だ。

桃山時代の陶工たちが残した
やきものかけらとの会話。完
品ではないからこそ、どういふも
のだったのかと想像が膨らむ。
土のすいひ場も残っているとか。
「すごい雑なつくりなんですよ。
当時は不純物が入らないように
と神経質になってなかったんで
しょうね。山の土にしろ、薪にし
ろ、自然のものだから不純物は絶
対にある。ある意味、不純物を大
事にしないと、いいもの、人々の
心に響くものではないと思いま
すね」。人間社会においても不
純物を排除することは、不健全
なこと。ありのままに受け入れ
るおおらかさが、桃山時代の作品
のおおらかさにつながっている
のかもしれない。



赤志野四方皿6300円。

竹をイメージして木のヘラで削っていく。「織部の縁にしようかと思っているんですが、単色にするとおもしろくないので、釉薬があつくなるヘラ目の場所を考えながら削っています。自然の葉でも単一の色ってないですもんね」と樋口さん。



「うつわをつくる時は、昔の寸法を基本につくります。が、現在はテーブルでの生活なので、サイズは若干調整をする時もあります」。写真の四方皿は5寸。鼠志野四方皿各5250円。



志野片口1万8900円。



釉薬のテストピース。

●プロフィール
樋口雅之 1967年岐阜県多治見市生まれ。1986年多治見工業高等学校窯業科卒。1990年名古屋芸術大学彫刻科卒。備前焼の山本陶秀氏のもとで修業し、1995年独立。

個展スケジュール
●ギャラリー 十三夜
10月5日(金)～10月14日(日)
大阪市北区豊崎5-1-15
●大丸神戸店美術画廊
10月30日(火)～11月5日(月)
●松坂屋名古屋店 美術画廊
2013年2月6日(水)～12日(火)

る。桃山時代の肌合いを大切にしながら、現代的なフォルムを追い求める樋口さん。今の時代にすっと馴染む志野焼は、日常の生活に小川のせせらぎのような心地よさを届けてくれそうだ。

「伝統的な美濃焼とは、表現方法が違うといわれることがありますがね」と樋口さん。樋口さん自身、桃山時代のやきものが纏っているオーラ、空気感は参考にしたいけれど、造形は現代の感性でいいという思いがある。

美濃焼の造形にとられないのは、大学で様々な素材の彫刻を学び、卒業後、美濃焼ではなく備前焼の人間国宝・轆轤の名手といわれる山本陶秀氏のもとで修業をした経験も大きいという。「備前焼は、釉薬を使わず形が勝負なので、轆轤のひき方を学びたかったです。でも、実際はそれだけでなく修業するために全国各地から来ていた人たちからも刺激を受けました。窯元である自分には、窯も作業場もあるけれど、そうでない人は、すべて自分でつくらないといけない。自分

も甘えてちゃだめだなと。」
手まわし轆轤で形をつくり、時にヘラで削っていく。かたい木のほうが削りやすいからと、ヘラは窯でたく薪の端材を削ったものだ。自家製の木のヘラで、迷いなくシューッと削っていく。肌合いは志野でありながら、彫刻的なラインが斬新なフォルムをつくりだす。

「桃山時代の茶碗は、シンプルなのに華やか。そんな空気感やオーラがあり、今にも動き出しそうな生命力あふれるものをつくりたいですね。茶碗ならば、懐に抱えた時にしっとりときて、へその下の丹田にずしっと響くものです。」

やはり廃りに感わされず、自分の信じたものに魂をこめる。魂が入っているものは、体温を感じるし、見る人に伝わる力がある。

現代の感性で生み出される、彫刻的なフォルム。